

# 中学生の不登校傾向に対する家族サポートの把握

—質問紙と動的家族画を用いた試み—

奈須野玲加<sup>1</sup>・石田 弓<sup>2</sup>

Understanding of family support for junior high school student's tendency to school refusal :  
An attempt using questionnaire method and Kinetic Family Drawing

Reika Nasuno and Yumi Ishida

In this study, we used Kinetic Family Drawing (KFD) and question sheets to examine the influence family support had on stress and the tendency toward school refusal for 254 junior high school students. Results suggest that family support indirectly reduced the students' tendency toward school refusal by alleviating stress in their everyday lives. Next, we divided the students into groups by the degree of family support they received, the stress they felt, and their tendency toward school refusal. Then, we looked at the unique features of each group's KFD and examined whether KFD was useful for understanding how the students felt about the support they received from their families. The results indicate that the factors “*omission of the father's image*”, “*intercommunication of the family's image*” and “*intercommunication of the family's image through talking*” were useful for understanding how the students felt about the support they received from their families. We believe that providing support to junior high school students based on the presence or absence of these indicators may help prevent students' tendency toward school refusal.

Key words: family support, tendency to school refusal, Kinetic Family Drawing (KFD)

## 問題と目的

### 1. 不登校傾向

菊島 (1999) によると、不登校の背景には、登校はしているものの学校に対して強い登校忌避感情を有している者や、登校忌避感情によって欠席しないまでも遅刻や早退を繰り返したり、短期間の欠席をしている者が存在している。五十嵐・萩原 (2004) は、登校しつつ登校回避願望がある状態は、不登校に至らないまでも学校生活を楽しむことに困難が生じており、不登校の前駆的状态と

---

<sup>1</sup> 児童心理治療施設広島新生学園

<sup>2</sup> 広島大学大学院教育学研究科

して「不登校傾向」であると定義している。また、中学生になって不登校にいたる子どもたちの中には小学校段階から「不登校傾向」を有している児童・生徒がいることが指摘されている。そこで本研究では、五十嵐・萩原 (2004) の定義を援用し、「不登校傾向」を「登校しつつも登校回避願望を有している状態」と定義する。

小林 (2004) によると、不登校の子どもが示す症状の多くは、不安反応、無気力反応、攻撃反応に分けられ、これらはストレスがかかってくると起きやすい。また、ストレス反応として身体症状があることが多く、不登校は様々なタイプに分けられている。そのため、不登校の前駆の状態である不登校傾向も様々なタイプに分けられると考えられる。例えば、五十嵐・萩原 (2002) の開発した不登校傾向尺度では、不登校傾向は「別室登校を希望する不登校傾向」、「遊び・非行に関連する不登校傾向」、「精神・身体症状を伴う不登校傾向」、「在宅を希望する不登校傾向」の4つに分類される。このことより、不登校傾向の状態像は多岐に渡る可能性が示唆される。そのため、不登校傾向への援助を検討する際には、様々なタイプの不登校傾向に焦点を当てる必要があると考えられる。

## 2. 家族サポート

ストレスを減らす役割を担う機能の1つに、ソーシャルサポートが挙げられる。ソーシャルサポートについては、様々な定義がされている。Cobb (1976) はソーシャルサポートを、①ケアされ愛されている、②尊敬され、価値ある者としてみなされている、③お互いに義務を分担する、と定義しており、受容的な面に着目している。さらに、森・堀野 (1992) は手段的、受容的の両側面を含んだ上で、「ある個人が、自分とかかわりを持っている人々 (家族、友達、先生など) からどのように、どの程度の援助を受けているかに関する認知」をソーシャルサポートとして捉えている。

大学生を対象に関係性やサポート受容とサポート知覚の関連を検討した研究では、父母においてはサポート期待の程度が、信頼という関係性、過去経験、規範により規定されることが示唆された (中村・浦, 2000)。大久保 (2005) が女子中学生に行った研究では、家族サポートのみにストレス軽減効果が認められており、下川・室田 (2008) では、家族とのコミュニケーションがない子どもは家族によるサポートが得られないことを指摘している。家族によるソーシャルサポートは家族との関係性、家族とのコミュニケーションなどを基に知覚されやすいと考えられる。以上のことから、本研究では家族サポートを「ある個人が、自分とかかわりを持っている家族からどのように、どの程度の情緒的・受容的な援助を受けているかに関する本人の認知」と定義する。

稲葉・浦・南 (1987) によると、ソーシャルサポートにはストレスに対する緩衝効果と直接効果が考えられており、緩衝仮説と直接仮説がある。緩衝仮説ではソーシャルサポートは「ストレスが存在しないときには心理的な症候には直接の効果をもたらさないが、ストレスが存在するときにそれを緩衝する機能をもつ」としており、直接仮説ではソーシャルサポートは「ストレスがあろうが無かろうが心理的症候に直接の効果を及ぼす」とされている。つまり、緩衝仮説では、サポートの有無はストレスが存在する時のみ違いとなって表れるのに対して、直接仮説では、平常時も、そしてストレスに直面した際にもソーシャルサポートの多少による一定の差異が存在すると考えられている。しかし、両者の効果を対立するものとは見なさず、ソーシャルサポートは両側面を持っている。菊島 (1999) が行った研究では、大学生・専門学校生を対象に、

中学時の不登校傾向ヘストレッサーとソーシャルサポートが及ぼす影響を検討した。その結果、学校・友人・家族のソーシャルサポートがストレスを緩和することにより、不登校傾向に対して間接的な緩衝効果の働きをしていたことが明らかとなった。特に準不登校群では家族による情緒的サポートの乏しさが指摘されており、不登校が学校、個人、家庭の要因で生じることを考えると、生徒がストレスを感じ不登校傾向という状態になる過程において、家族の情緒的サポートに焦点を絞ってどのような影響を与えるかを検討することは、不登校を防止する上で大切であると考えられる。しかしながら、菊島 (1999) では「学校が嫌だと思う」に「よくあった」と回答した者を不登校感情群、「学校が嫌で遅刻早退」を「よくした」と回答した者を遅刻早退群、「学校が嫌で休んだこと」が「1年間で10日以上あった」と回答した者を準不登校群としているものの、不登校傾向の状態像は多岐に渡る可能性が示唆されており (五十嵐・萩原, 2002), 様々なタイプの不登校傾向を測定する必要があると考えられる。回想法による問題点も指摘されており、中学生を対象に調査を行うことで、現代の中学生特有の傾向を明らかにすることが出来ると推測される。そこで本研究では、中学生を対象とし、ストレスを感じ不登校傾向という状態になる過程において家族サポートがどのように働くかについて検討する。

### 3. 動的家族描画法 (KFD)

描画法の1つに、動的家族描画法 (Kinetic Family Drawing) がある。Burns & Kaufman (1972 加藤・伊倉・久保沢 1998) が開発した描画法であり、「自分を含めて家族が何らかの行為・動作をしているところ」を描くように求めることで家族成員の描写が多様なものになると考えられている (日比, 1986)。また、石川 (1984) によると、教示が非動的な家族画よりも動的な KFD の方が、テストとして多量の有益な情報を提示すると見なされている。動的な家族成員を描くよう促すことで、人物像の大きさとその順序や、画面上での位置などについての多様性が生まれてくる。

日比 (1986) によると、KFD で描かれた人物像の顔の方向について、正面は肯定、横顔は半肯定、背面は否定感情と関連する場合が多い。人物像間の距離については、父親との距離が建前論的、心的距離を置いた態度のあらわれ、母親との距離が無意識の同一視という本音の態度のあらわれであるとされる。さらに、家族成員間の距離は、被検者から見た親密性の度合いや感情的離反の強さを物語っている。羽根 (1998) によると、描画に動きを加えることにより、家庭内の愛情、競争、葛藤、不安、拒絶、敵意などといった様々な指標が、行為、様式、象徴、また自己の位置や家族成員との距離などに表現され、描画から非常に有益な情報を得ることができる。

これらのことより、KFD を用いることで、生徒が日々感じている家族サポートを視覚的・具体的に捉えることが出来ると考えられる。平田・比嘉 (2014) によると、KFD は特に言語による表現が苦手な子どもの手助けになり、また子どもが質問紙などで家族に関することを答える際に意識的に回避したりする子どもであっても KFD には素直に家族の今を表現していることが多い。KFD は子どもが家族成員間の相互作用をどのように認知しているかを把握するための方法として学校現場の教師が最も臨場的に活用しやすいと考えられている。奈須野・石田 (2016) が高校生を対象に家族機能と動的家族画の関連を検討した研究では、家族機能が良くても KFD の印象評定値が悪いことが示された生徒が全体の約2割いたことが明らかになっており、質問紙には示されない無意識的側面

が KFD に表現されることが示唆された。質問紙と KFD を用いて実際の家族サポートの様態を検討することで、学校現場において KFD を扱う意義に繋がると考えられる。

#### 4. 家族サポートと関連があると考えられる KFD の指標

ストレスと不登校傾向の軽減に機能する家族サポートを検討するに当たり、家族との関わり、自己からの家族に対する認知、家族との情緒的な関係の視点が重要であると考えられる。そこで、本研究では家族サポートと関連があると想定される以下の 6 つの指標を扱うこととする。

①顔の方向：橋本 (2003) が大学生・短大生・専門学校生・中高生を対象に共感性と KFD の関連について検討した研究では、親しい相手の顔の方向、親しくない相手の顔の方向、自分の顔の方向において共感性の高低で違いが見られた。共感性は、ソーシャルサポートを構成する重要な因子であることが指摘されている (岩田・森谷, 2005) ことから、家族サポートにおいても関連が見られる指標であると考えられる。また日比 (1986) によると、人物像の顔の方向は正面が肯定、横顔が半肯定・半否定、背面が否定感情と関連する場合が多い。

②人物像の省略：奥田 (2007) が大学生を対象に摂食障害傾向と KFD の関連を検討した研究では、摂食障害傾向高群女性ほど人物像の省略が多かった。摂食障害治療開始後は家族の理解・支持が重要であり、摂食障害回復群ではソーシャルサポートを有する者が有意に多いことが明らかになっている (岡本・三宅・神人・矢式・内野・磯部・高田・矢島・二本・松山・石原・杉原・古本・玉田・高橋・山手・横崎・日山・吉原, 2013)。これらのことから、人物像の省略は家族サポートと関連のある指標であると考えられる。日比 (1986) によると、省略や抹消が行われている家族成員には敵意や不安などの否定感情を抱いていると考えられている。

③各人物の高さ：北本・宮本 (2004) が小学 4 年生から 6 年生を対象に抑うつと KFD の関連を検討した研究では、抑うつ中核高群では自己像を小さく描く傾向が見られ、人物像の高さにおいて違いが見られた。抑うつは家族サポートと関連があることが示されており (永井, 2010)、人物像の高さは家族サポートと関連のある指標であると考えられる。日比 (1986) によると、個々の家族成員に対する関心の度合いが人物描画の基本的特徴としての相対的な大きさに投影されると考えられており、肯定的にしる否定的にしる関心の大きい人物や身体部分が大きく描かれてくるとしている。

④「自分」から各人物への距離：北本・宮本 (2004) が小学 4 年生から 6 年生を対象に抑うつと KFD の関連を検討した研究では、自分と父親の距離において、抑うつ高群では父親との距離が遠く、低群では近いという違いが見られた。抑うつは家族サポートと関連があることが示されており (永井, 2010)、人物像の高さは家族サポートと関連のある指標であると考えられる。日比 (1986) によると、人物像間の距離はその人物間の親密性の度合いや感情的離反の強さを表すとしている。

⑤家族間の相互交流：高橋・大野 (2003) が保育園児の母親を対象に子どもの愛着行動と KFD の関連を検討した研究では、愛着行動が多いほど KFD での家族の相互作用性が見られた。子どもの愛着スタイル、サポート希求は両親サポートと関連があることが明らかにされており (丹波, 2003)、家族の相互交流は家族サポートと関連の見られる指標であると考えられる。下川・室田 (2008) では、家族とのコミュニケーションがない子どもは家族によるサポートが得られないことが指摘されており、また本研究における家族サポートは自分とかわりを持っている家族と定義しているよう

に、家族サポートには家族成員間でどのような相互交流が行われているかが影響すると考えられる。

⑥様式：様式には区分、包囲、人物下線、上部の線、下部の線、辺縁位がある。小学4年生から6年生を対象に抑うつとKFDの関連を検討した研究では、高群において区分が有意に多く(北本・宮本, 2004)、高校生を対象に家族機能とKFDの関連を検討した研究では、区分、包囲、下部の線に有意な差が見られた(奈須野・石田, 2016)。抑うつは家族サポートと関連があることが(永井, 2010)、家族機能は成人男女において家族サポートと関連があることが示されている(平川・松本・境, 2010)。これらのことより、様式は家族サポートと関連のある指標であると考えられる。日比(1986)によると区分は家族の感情的隔離、包囲は他者や他者との関係における自分自身に開放的な感情的態度を持つことが出来ないこと、辺縁位は防衛的であることを意味していると考えられており、このような様式を示す調査対象者は家族との関わりに隔たりがあり、家族サポートを十分に受容できていない可能性があると思われる。また、人物下線は家族成員間の人間関係の不安定さ、上部の線は家族関係での情緒不安、下部の線は崩壊しかけている家庭などの強いストレスがあることを意味していると考えられており、このような様式を示す調査対象者は家族内の不安定さや家族成員に対する不安から家族サポートを受けることが出来ていないことが考えられる。

## 5. 本研究の目的

本研究では、家族サポートが中学生の不登校傾向に与える影響を明らかにすると同時に、KFDに表現される指標によって中学生が感じている家族サポートを把握することの有用性を検討することを目的とする。具体的には、まずストレスが不登校傾向に影響を与える過程での家族サポートの働きを検討する。次に、家族サポート、ストレス、不登校傾向の程度によって中学生を分け、それぞれの群におけるKFDの特徴を検討し、中学生の感じている家族サポートを把握するために有用な指標を明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 1. 調査対象者

広島県内の公立中学校2校に通う生徒1年生から3年生254名を対象に調査を行った。その内、質問紙の分析はデータに欠損のあった16名を除いた238名(男子114名, 女子123名, 不明1名)のデータを対象とした。KFDの分析は描画を描いていない58名を除いた196名(男子88名, 女子107名, 不明1名)のデータを対象とした。

### 2. 調査期間

2017年9月から12月に調査を実施した。

### 3. 使用尺度

#### ①不登校傾向尺度

五十嵐・萩原(2004)の尺度を用いた。別室登校を希望する不登校傾向、遊び・非行に関連する不登校傾向、精神・身体症状を伴う不登校傾向、在宅を希望する不登校傾向の4因子13項目から成る。「あてはまらない」から「あてはまる」の4段階で回答を求めた。

## ②日常ストレッサー尺度

西野・小林・北川 (2009) が作成したものであり、友人関係、学業、家族の 3 因子 16 項目から成る。高い信頼性が得られている。各項目について、最近経験したかどうかを 2 件法で回答させ、経験したと答えた場合には、その出来事を経験したことがどの程度嫌だったかについて「全然いやでなかった」から「非常にいやだった」の 4 段階で回答を求めた。

## ③家族サポート尺度

萱口・千田・久田 (1989) によって作成された学生用ソーシャルサポート尺度 (The Scale of Expectancy for Social Support : SESS) の中学生版を使用した。将来的に何らかの問題が生じた時に周囲の人々からどの程度の援助が期待できるのかについて調べることを目的とした尺度であり、16 項目から成る。様々なサポート源について質問することが出来る尺度であるが、本研究ではサポート源を家族に限定したため、「家族サポート尺度」と表記した。将来どの程度の援助が期待できるかを「絶対ちがう」から「きっとそうだ」までの 4 段階で回答を求めた。

## 4. 使用描画

動的家族描画法 (KFD) を使用した。KFD の教示文は「あなたを含めて、あなたの家族全員について、何かしているところを描いてください。絵の上手下手は関係ありません。棒人間やマンガのような絵にせず、人物全体を描くようにしてください。描き終わったら、描いた人物が誰なのかがわかるように、人物のすぐ横に「自分」、「母親」、「父親」などと書き込んでください。絵を描き終わった後に、質問に回答していただきます。先生から指示のあった時間までに、絵を描いて質問に答えてください。」とした。描画終了後、描いた絵の説明と絵の中で行われる会話の内容についての説明を書かせた。

## 5. 手続き

調査はクラス単位で実施し、回答は無記名で行われた。実施には、中学校の教員に生徒への実施方法の説明を依頼した。初めに KFD の教示文を読ませ、KFD を描かせた。その後、絵に関する最後に、フェイス項目として、性別、学年、家族構成を記入させた。調査時間は 30 分であった。

倫理的配慮として、学校長へ調査の説明を行い、承諾書に署名を頂いた。生徒には、本調査では、データは統計的に処理され個人の回答が公開されることはないこと、調査は成績評価とは関係がないことを紙上で説明した。また、本研究科の倫理審査にて研究内容に関する承認を受けた。

## 結果

### 1. 家族サポートが不登校傾向に及ぼす影響

#### (1) 尺度構成

##### ①不登校傾向尺度

不登校傾向尺度 13 項目について確認的因子分析を行った。十分な因子負荷量 ( $|.30|$ 以上) を示さなかった 2 項目を削除し、11 項目 3 因子を採用した。適合度指標  $CFI=.906$ 、別室登校を希望する不登校傾向因子  $\alpha=.783$ 、遊び・非行に関連する不登校傾向因子  $\alpha=.671$ 、精神・身体症状を伴う不

登校傾向因子  $\alpha = .780$  であった。

## ②日常ストレス尺度

日常ストレス尺度 16 項目について確認的因子分析を行った。十分な因子負荷量 ( $.30$ 以上)を示さなかった 1 項目を削除し、15 項目 3 因子を採用した。適合度指標 CFI=.900, 友人関係因子  $\alpha = .867$ , 学業因子  $\alpha = .790$ , 家庭因子  $\alpha = .729$  であった。

## ③家族サポート尺度

家族サポート尺度 16 項目について確認的因子分析を行った。全てにおいて十分な因子負荷量を示したため、16 項目 1 因子を採用した。適合度指標 CFI=.942,  $\alpha = .962$  であった。

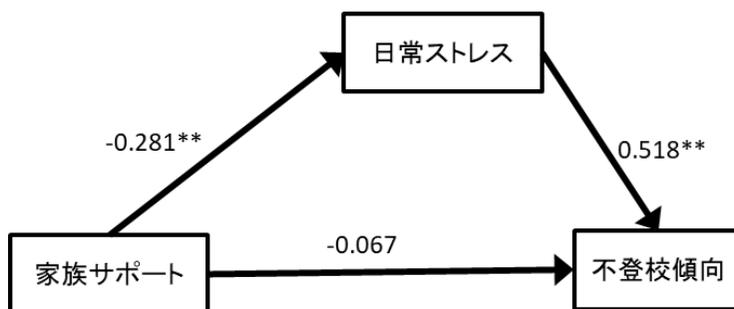
### (2) 不登校傾向に影響を及ぼす要因モデルの検討

不登校傾向に影響を及ぼす要因の関係を検討するために、菊島 (1999) の不登校傾向生成モデルを参考に仮説的モデルを作成し検討を行った。共分散構造分析を行い、モデルの適合度が最も適切であると判断されたモデルをパス図に表現した (Figure 1)。モデルの適合度の指標には GFI, AGFI を参考に用いた。GFI=1.00, AGFI=1.00 であった。Figure 1 より、家族サポートは日常ストレスに負の影響を与え、日常ストレスは不登校傾向に正の影響を与えることが明らかになった。このことより、家族サポートは日常ストレスを下げることで間接的に不登校傾向を軽減することが示された。そこでこのモデルを「家族サポートによる不登校傾向軽減モデル」と名付けた。

## 2. KFD による家族サポートの把握の試み

### (1) 調査対象者の群分け

調査対象者の不登校傾向、ストレス、家族サポートの程度によって KFD の特徴の違いを検討するために、不登校傾向尺度得点、日常ストレス尺度得点、家族サポート得点を用いてクラスタ分析 (Ward 法, 平方ユークリッド距離) を行った。その結果、家族サポートがないと感じており不登校傾向とストレスが高い「家族サポートなし・不適応群」、質問紙では家族サポートがないと回答しているものの不登校傾向とストレスが低い「家族サポートなし・適応群」、家族サポートがあると感じており不登校傾向とストレスが低い「家族サポートあり・適応群」が抽出された (Figure 2)。



(係数は標準化パス係数, \*\* $p < .01$ )

Figure 1. 家族サポートによる不登校傾向軽減モデル

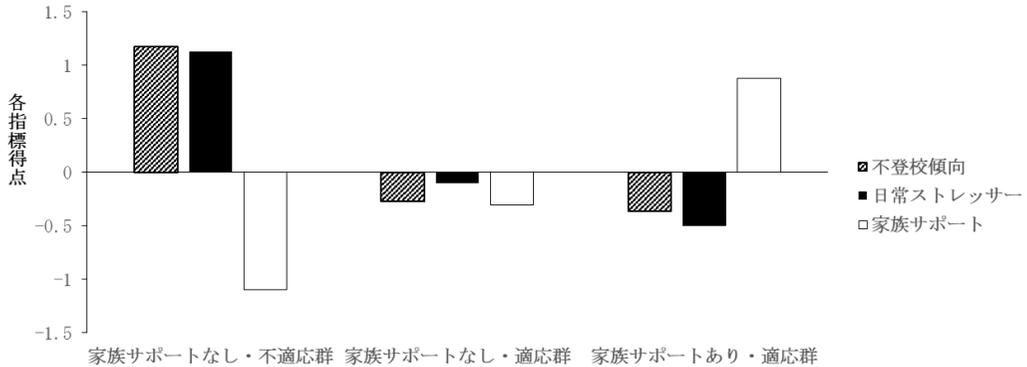


Figure 2. クラスタ分析結果

## (2) 動的家族画の分析指標の群間比較

### ①顔の方向

父、母、自分、同胞それぞれの顔の方向を、「正面」、「横向き」、「背面・輪郭のみ」に分類した。同胞が2人以上いる場合は、自分に一番近く描かれている同胞の評定を行った。また、父、母それぞれの顔の方向の組み合わせによって父母の顔の方向を「共に正面」、「片方のみ正面」、「共に横顔」、「共に背面・輪郭」、「片方が横顔で片方が背面・輪郭」の5つに分類した。3群における父、母、自分、同胞の顔の方向について $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な差は見られなかった（父： $\chi^2=3.854$ ,  $df=4$ ,  $n.s.$ ；母： $\chi^2=7.011$ ,  $df=4$ ,  $n.s.$ ；自分： $\chi^2=3.659$ ,  $df=4$ ,  $n.s.$ ；同胞： $\chi^2=1.392$ ,  $df=4$ ,  $n.s.$ ）。また、3群における父母の顔の方向について期待値5未満のセルが20%以上であったため、Fisherの直接確率検定を行った結果、有意な差は見られなかった。

### ②人物像の省略

両親と調査対象者についてそれぞれ省略の有無の評定を行った。同胞については同居している場合と別居している場合で省略の意味に違いが出る可能性が高いため検討をしなかった。3群における父と母の省略について、 $\chi^2$ 検定を行った結果、父の省略にのみ有意な差が見られた（父： $\chi^2=9.062$ ,  $df=4$ ,  $p<.10$ ；母： $\chi^2=2.871$ ,  $df=4$ ,  $n.s.$ ）。そのため父の省略について残差分析を行った。家族サポートなし・不適応群では「省略なし」が有意に多く、家族サポートなし・適応群では「全省略」が有意に多かった。また、3群における自分の省略について期待値5未満のセルが20%以上であったため、Fisherの直接確率検定を行った結果、有意な差は見られなかった。

### ③各人物の高さ

父、母、自分、同胞について頭の中心部から足の先もしくは足が描かれていない場合は描かれた箇所までの距離を人物の高さとして測り、橋本(2003)を参考に人物像全員の高さの平均で割ったものを相対的な人物の高さとして算出した。また、同胞については、兄・姉を上位同胞、弟・妹を下位同胞としてまとめた。その高さについてそれぞれ3群で分散分析を行った結果、どの群間にも

有意な差は見られなかった (父:  $F=0.666$ , *n.s.*; 母:  $F=0.044$ , *n.s.*; 自分:  $F=0.496$ , *n.s.*; 同胞:  $F=2.018$ , *n.s.*; 上位同胞:  $F=1.884$ , *n.s.*; 下位同胞:  $F=0.359$ , *n.s.*)。

#### ④「自分」から各人物への距離

父, 母, 同胞について「自分」から各家族成員への距離を各人物間の距離とし, 橋本 (2003) を参考に「自分」から家族全員への距離の平均で各人物間の距離を割ったものを人物間の相対的距離として算出した。また, 兄・姉を上位同胞, 弟・妹を下位同胞としてまとめた。その距離についてそれぞれ 3 群で分散分析を行った結果, どの群間にも有意な差は見られなかった (父:  $F=0.415$ , *n.s.*; 母:  $F=1.181$ , *n.s.*; 同胞:  $F=1.186$ , *n.s.*; 上位同胞:  $F=0.367$ , *n.s.*; 下位同胞:  $F=0.868$ , *n.s.*)。

#### ⑤家族間の相互交流

KFD に見られる家族間の相互交流, また描画後の質問によって示された行動による家族間の相互交流と会話による家族間の相互交流のそれぞれの有無について評定を行った。KFD に見られるものについては, 家族が何か 1 つの活動に取り組んでいる様子がある場合は「相互交流あり」とし, その中で相互交流が見られる家族成員によって, 「家族全員」, 「一部の家族成員同士」 (Figure 3) の 2 つに分類した。また, 顔や人物が単に並んでいる場合は「相互交流なし」, 手をつないでいるなど何らかの接触を持って並んでいる場合は「相互交流あり」として評定基準を設けた。また, 評定の信頼性を確認するために筆者と心理学専攻の大学院生 4 名に各描画に相互交流が見られるかどうかを「相互交流なし」, 「家族全員」, 「一部の家族成員同士」のいずれかを選ぶことで評定させ, kappa 係数を求めた。その結果,  $k=.585$ ,  $p<.01$  であったため, 高い一致率であると判断した。そこで, 5 名の評定値を参考に描画に見られる相互交流について評定を行った。5 名の評定値が異なった場合は, 最も多く選択された評定値を採用した。

描画後の質問への回答内容については, 行動による相互交流と会話による相互交流について評定を行った。行動による相互交流については, 家族が何か 1 つの活動に取り組んでいる記述がある場合は「相互交流あり」とし, 描画に見られる家族間の相互交流と同様に家族成員によって「家族全員」, 「一部の家族成員同士」のどちらかに分類した。会話による相互交流については, 別々の活動をしていても言語によるコミュニケーションがある場合は「相互交流あり」とし, 描画に見られる相互交流と同様に家族成員によって「家族全員」, 「一部の家族成員同士」のどちらかに分類した。

3 群におけるそれぞれの相互交流の有無について  $\chi^2$  検定を行った結果, KFD に見られる家族間の相互交流と会話による家族間の相互交流に有意な差が見られた (KFD:  $\chi^2=9.524$ ,  $df=4$ ,  $p<.05$ ; 行動:  $\chi^2=6.585$ ,  $df=4$ , *n.s.*; 会話:  $\chi^2=10.836$ ,  $df=4$ ,  $p<.05$ )。そのため KFD に見られる家族間の相互交流と会話による家族間の相互交流について残差分析を行った。家族サポートなし・不適応群では「家族全員」の相互交流が有意に少なく, 「一部の家族成員同士」の相互交流が有意に多かった。また, 家族サポートなし・不適応群では「家族全員」の相互交流が有意に少なく, 家族サポートあり・適応群では有意に多かった。

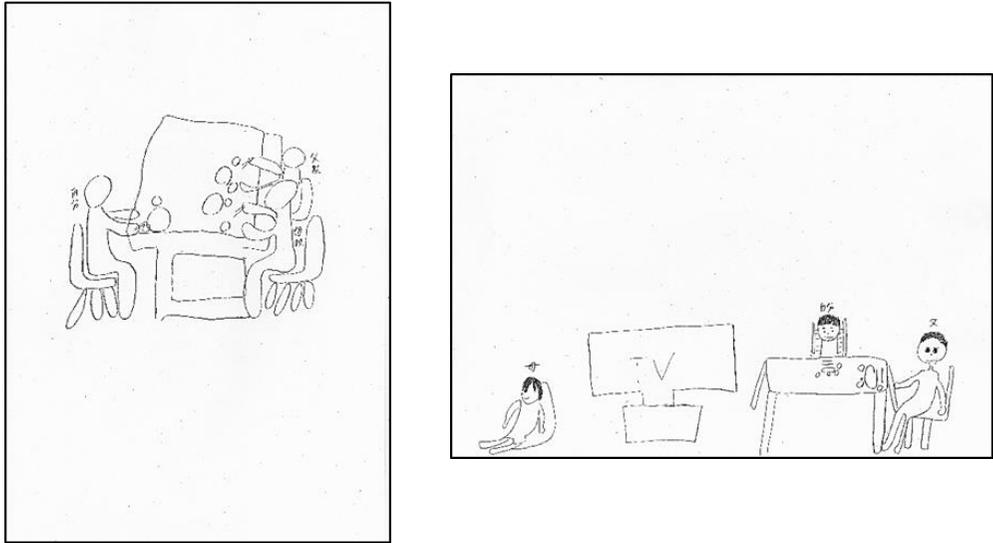


Figure 3. 「家族全員」の相互交流 (右) と「一部の家族成員同士」の相互交流 (左) の例の模写

## ⑥様式

様式の定義について日比 (1986) を参考とし、区分を漫画のコマ割りのように用紙をあらかじめいくつか分割しそこに家族メンバーを描いたもの、包囲を一人あるいは複数の人物を囲ってカプセルに入れてしまうこと、人物下線を特定の人物の下に線を引くこと、上部の線を用紙の上部全体に線が引かれること、下部の線を用紙の下部全体に線が引かれること、辺縁位を用紙の端に沿って描くことと定義し、評定を行った。3群における包囲、人物下線、辺縁位の様式について $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な群間差は見られなかった (包囲： $\chi^2=0.489$ ,  $df=2$ ,  $n.s.$ ; 人物下線： $\chi^2=4.492$ ,  $df=2$ ,  $n.s.$ ; 辺縁位： $\chi^2=0.890$ ,  $df=2$ ,  $n.s.$ )。また、3群における区分、上部の線、下部の線の様式について期待値5未満のセルが20%以上であったため Fisher の直接確率検定を行った結果、有意な差は見られなかった。

## 考察

### 1. 家族サポートが不登校傾向に及ぼす影響

#### (1) 各尺度の検討

##### ①不登校傾向尺度

不登校傾向尺度項目について因子分析を行った結果、別室登校を希望する不登校傾向因子、遊び・非行に関連する不登校傾向因子、精神・身体症状を伴う不登校傾向因子の3因子が見出された。別室登校を希望する不登校傾向因子は、「教室に行かなくても保健室や相談室で勉強できればいいと思

う」など学校に行きながらも別室にいることを希望する項目から成っている。五十嵐・萩原 (2004) の因子構造と一致しており、今日の中学生においても学校の中の保健室や相談室など教室以外の居場所は安心できる環境となっていると考えられる。遊び・非行に関連する不登校傾向因子は、「学校に行かず、家で友達と遊んでいたい」、「学校や自分の家で仲のいい友達と過ごすより、友達の家で過ごす方が楽しい」など友人と過ごすことを希望する項目から成っている。五十嵐・萩原 (2004) では在宅を希望する不登校傾向因子であった「学校に行かず、家でゲームをして過ごせたらと思う」という項目は遊び・非行に関連する不登校傾向因子に加わった。現在のゲームはオンラインで簡単に友人と繋がる事が出来るため、家でゲームをしていたとしても中学生にとっては友人と遊ぶことと同じ意味を持つのではないかと考えられる。精神・身体症状を伴う不登校傾向因子は、「少しのことで気分が落ち込み、学校に行くのがつらい」など気分の落ち込みや頭痛・腹痛などの身体的痛みを伴うことが示された項目から成っている。五十嵐・萩原 (2004) の因子構造と一致しており、今日の中学生においても精神・身体症状を伴う登校回避感情があることがあると考えられる。

不登校傾向得点の平均値は 1.83 であった。「あてはまらない」から「あまりあてはまらない」の間にいる生徒が多いことが考えられ、今日の中学生の不登校傾向はそれほど高くないと推測される。しかし、最大値は 3.55 であり、「すこしあてはまる」から「あてはまる」と回答した生徒が 5% 存在し、不登校傾向を強く感じている生徒もいることが明らかになった。

## ②日常ストレス尺度

日常ストレス尺度について因子分析を行った結果、友人関係因子、学業因子、家庭因子の 3 因子が見出された。友人関係因子は「友だちにいじめられる」など、友人との関係性の中で生じる不快な出来事に対するストレスから成っている。西野ら (2009) の因子構造と一致しており、今日の中学生においても友人関係上の不快な出来事やいじめられる体験はストレスとなると考えられる。学業因子は「勉強がめんどくさい」など、学校での授業や勉強に対するストレスから成っているが、西野ら (2009) の因子構造から「テストのせいせきが悪い」という 1 項目が削除された。今日の中学生にとっては、定期的にあるテストの結果はストレスに感じないものの、普段の勉強や授業について苦痛を感じることはストレスとなると考えられる。家庭因子は「家で、がまんすることがある」など、家庭や親に対するストレスから成っている。西野ら (2009) の因子構造と一致しており、今日の中学生においても家族や親に無視されることや我慢することはストレスとなると考えられる。

日常ストレス得点の平均値は 0.78 であった。日常生活の中でストレスとなりうる出来事を「経験なし」や「経験あり」でも「全然いやでなかった」から「少しいやだった」の間にいる生徒が多いと考えられ、今日の中学生の日常的なストレスはそれほど高くないと推測される。しかし、最大値は 3 であり、「かなりいやだった」から「非常にいやだった」と回答した生徒が 4% 存在し、日常で強くストレスを感じている生徒もいることが明らかになった。

## ③家族サポート尺度

家族サポート尺度について因子分析を行った結果、1 因子構造が見出され、「いつでもあなたのことを信じてくれている」、「あなたが落ち込んでいると元気づけてくれる」など情緒的サポートがあることを示す項目から成っている。萱口ら (1989) の学生用ソーシャルサポート尺度の因子構造

と一致しており、家族になぐさめてもらうことや励ましてもらうことなどは今日の中学生にとっても情緒的なサポートとして感じられると考えられる。

家族サポート得点の平均値は 3.13 であった。「たぶんそうだ」から「きっとそうだ」の間にいる生徒が多いと考えられ、家族からのサポートを受けることができると感じている中学生は多いと推測される。しかし、最小値は 1 であり、「絶対ちがう」から「たぶんちがう」と回答した生徒が 8% 存在し、家族からサポートを受けられると感じていない生徒もいることが明らかになった。

## (2) 家族サポートによる不登校傾向軽減モデル

不登校傾向に影響を及ぼす要因として家族サポートの働きを検討した結果、ストレスに負の影響を与え、ストレスは不登校傾向に正の影響を与えることが明らかとなった。このことより、家族サポートは不登校傾向の軽減に直接的な影響を持たないものの、日常のストレスを軽減することで間接的に不登校傾向の軽減に作用すると考えられる。菊島 (1999) の不登校傾向生成モデルでは、家族・友人知人・教師を含めた者からのソーシャルサポートが教師と親に対する学生のストレスを緩和し、間接的に不登校傾向を防止する働きをしていたことが示されている。現代の中学生においても、家族による情緒的サポートは日常のストレスを下げ、不登校傾向を軽減する上で重要な役割を持っていると考えられる。よって、中学生が日常的にストレスを感じた場合に家族サポートが働いていると、生徒が不登校傾向になることを未然に防げる可能性がある。

## 2. KFD による家族サポートの把握の試み

### (1) 3 群の家族サポート・ストレス・不登校傾向の特徴

調査対象者を不登校傾向尺度得点、日常ストレス尺度得点、家族サポート尺度得点を用いてクラスタ分析による群分けを行った結果、家族サポートなし・不適応群、家族サポートなし・適応群、家族サポートあり・適応群の 3 群が抽出された。家族サポートなし・不適応群は、家族サポートの認知に乏しいため、日常的に感じているストレスが軽減されにくく、不登校傾向が高いと考えられる。家族サポートなし・適応群は、家族サポートを受けているという認知が乏しいものの、不適応は生じていない群であると考えられる。家族サポートあり・適応群は、家族サポートを十分に認知しており、家族サポートが日常で感じるストレスを軽減しているため、ストレスや不登校傾向が低いものと考えられる。

### (2) 動的家族画の指標の検討

#### ①人物の省略の検討

父、母、自分の省略について 3 群間で比較した結果、家族サポートなし・不適応群で父の「省略なし」が有意に多かった。日比 (1986) によると、人物像の省略は敵意や攻撃や不安などの否定感情を抱いている人物に関して生じるとしている。また、奥田 (2007) によると、摂食障害傾向の高い女性ほど KFD における人物像の省略が多いことが明らかになっており、岡本ら (2013) によると、摂食障害の治療には家族の理解・支持が重要であり、摂食障害回復群ではソーシャルサポートを有する者が多いことが指摘されている。これらのことより、家族サポートの認知が乏しい中学生は人物像の省略が多いと考えられたが、本研究では家族サポートの認知が乏しく、ストレスと不登校傾向が高い中学生は父親像を省略することなく描くことが多かった。意識水準では家族サポートの認

知に乏しいため、ストレスと不登校傾向は高くなっており、無意識水準では父親からのサポートを受けたいと感じているため、KFDに父親像を省略することなく描くことが他の群の中学生よりも多かったと考えられる。

一方、家族サポートなし・適応群では父親の「全省略」が有意に多かった。人物像の省略は否定感情を抱いている人物に関して生じるとされている(日比, 1986)ことから、ストレスと不登校傾向は低い家族サポートの認知に乏しい中学生は、無意識水準では父親に対して否定感情を持っていると考えられる。また、中村・浦(2000)は大学生を対象に関係性やサポート受容とサポート知覚の関連を検討し、父母においてはサポート期待の程度が、信頼という関係性、過去経験、規範により規定されることを示した。さらに、岡安・嶋田・坂野(1993)が中学生の身近にいる人々からのソーシャルサポートの期待が学校ストレス過程に及ぼす影響について検討した研究では、女子においてストレス軽減効果として母親サポートよりも父親サポートが有効であることが示され、父親サポートに対する期待が高い生徒は普段父親と接触する機会が多く、父親との親密性が高いと考えられている。これらのことより、母親からのサポートと父親からのサポートが担う役割には違いがあると考えられる。本研究では、質問紙では家族全体のサポートについて質問したため、母親からのサポートと父親からのサポートの違いについては検討できなかったが、KFDに見られる省略の指標と家族サポートとの関連については、父親と母親で違いがあり、父親からのサポートは家族による情緒的サポートの認知に重要な役割を持っている可能性がある。家族サポートなし・適応群の生徒は父親に対して否定感情を持っている可能性があり、父親に対するサポート期待が少なく、ストレスを軽減させる作用を持つ家族サポートの認知に乏しいと考えられる。

## ②家族間の相互交流の検討

KFDに見られる相互交流、描画後の質問によって示された行動による相互交流、会話による相互交流についてそれぞれ3群間で比較した結果、KFDに見られる相互交流と会話による相互交流において有意な差が見られた。KFDに見られる相互交流では、家族サポートなし・不適応群において「家族全員」の相互交流が有意に少なく、「一部の家族成員同士」の相互交流が有意に多かった。家族サポートの認知に乏しく、ストレスと不登校傾向を強く感じている中学生は、他の群の中学生よりもKFDにおいて家族全員ではなく一部の家族成員同士が交流をしている表現を示しやすく、無意識水準においても家族全員の交流が少ないと感じていると考えられる。

また、会話による相互交流では、「家族全員」の相互交流が家族サポートなし・不適応群において有意に少なく、家族サポートあり・適応群において有意に多かった。家族サポートの認知に乏しく、ストレスと不登校傾向が高い中学生は、会話によって家族全員で交流することが少ないと無意識水準において感じているのに対して、家族サポートを十分に認知しており、ストレスと不登校傾向が低い中学生は会話によって家族全員と相互的に交流することが多いと無意識水準において感じていると考えられる。

以上のことより、家族サポートの認知に乏しく、ストレスと不登校傾向が高い中学生のKFDには「家族全員」によって相互交流が行われる様子が描かれたり、会話をしていたりする表現が他の中学生よりも少ないと考えられる。よって、会話などによる相互交流の有無の指標によって、中学生

の家族からの情緒的サポートの認知について把握することが出来ると考えられる。

### 3. 総合考察

#### (1) 本研究の成果

本研究では、中学生を対象に家族サポートが不登校傾向に与える影響を明らかにし、また中学生の家族サポートの認知を把握するためにKFDが有用であるかを明らかにするために2つの研究を行った。その結果、家族サポートは不登校傾向の軽減に直接的な影響を持たないものの、日常のストレスの軽減に影響を与えることで間接的に不登校傾向の軽減に作用することが明らかとなった。さらに、KFDに表される父親像の省略とKFDに見られる相互交流と会話による相互交流の有無の指標が、中学生の認知している家族サポートを把握するのに役立つことが示された。

本研究より、不登校傾向の原因となりうるストレスを家族サポートが軽減する作用を持つと考えられる。また、中学生がストレスと不登校傾向を軽減する家族サポートを認知しているかどうかを把握するためにKFDを扱うことの有用性が示唆された。特に会話などによる相互交流がKFDに描かれるかどうかによって、家族サポートの認知に乏しい中学生をアセスメントすることが出来ると考えられる。そのような中学生に対して家族から情緒的サポートを得ることが出来るような支援を行うことで、不登校傾向の予防に繋がる可能性がある。また、ストレスと不登校傾向が低いものの、家族サポートの認知に乏しい中学生は父親像を描かないことが多く、学校適応に問題は見られないものの、家族サポートを十分に感じる事が出来ていない中学生を父親像の省略の有無によってアセスメントすることが出来る可能性が示唆された。井上(1989)は、子どもの心理的危機を回避する上での父親の役割として、子どもとの接触時間を増やし、家庭における存在感を高める努力が必要であるとしている。父親からのサポートは中学生の不登校傾向が高まりを未然に防止するために必要不可欠であると考えられる。KFDにおいて父親を省略する中学生に対して、家庭での父親の存在感を高める働きかけや、父親との接触を持てるような場や時間を増やすなどの支援が考えられる。

#### (2) 今後の課題

本研究では、母親からのサポートと父親からのサポートが担う役割には違いがある可能性が示されたが、家族全体の情緒的サポートについて検討を行ったため、各家族成員の情緒的サポートとKFDに描かれる指標との関連については検討を行わなかった。各家族成員からの情緒的サポートの認知とKFDに描かれる指標の関連を検討することによって、家族サポートの認知に乏しい中学生に対する具体的支援を考えるための一助になると考えられる。

### 引用文献

- Burns, R. C. & Kaufman, S. H. (1972). Actions, styles and symbols in kinetic family drawings (K-F-D): An interpretative manual. Brunner/Mazel.
- (バアンズ, R. C. カフマン, S. H. 加藤孝正・伊倉日出一・久保義和 (訳)(1998). 子どもの家族画診断 黎明書房)
- Cobb, S. (1976). Social Support as a Moderator of Life Stress Psychosomatic Medicine, 38, 300-314.

- 羽根由紀奈 (1998). 動的家族画 (KFD) にみられる親子関係についての基礎的研究:子どもと母親の描画を通して 名古屋大学教育学部紀要.心理学, 45, 214-215.
- 橋本秀美 (2003). 描画法にみられる共感性についての研究 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学校教育実践学専攻学校教育方法連合講座
- 日比裕泰 (1986). 動的家族描画法 ナカニシヤ出版
- 平川沙織・松本美奈子・境 泉洋 (2010). 職業性ストレスにおける家族機能とソーシャルサポートの関連 徳島大学総合科学部人間科学研究, 18, 15-26.
- 平田幹夫・比嘉紀枝 (2014). 小学生の家族満足度と動的家族画 (KFD) の検討 教育実践総合センター紀要, 21, 155-161.
- 五十嵐哲也・萩原久子 (2002). 中学生における不登校傾向に関する研究 (1) 不登校傾向尺度の開発 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 275.
- 五十嵐哲也・萩原久子 (2004). 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 52, 264-276.
- 稲葉昭栄・浦 光博・南 隆男 (1987). 「ソーシャル・サポート」研究の現状と課題 慶應義塾大学, 哲学, 85, 109-149.
- 井上美紗子 (1989). 発展期の家族過程と危機 岡堂哲雄 (編) メンタルヘルス・シリーズ 家族関係の発達と危機 同朋舎
- 石川 元 (1984). 家族研究における2つの流れ—家族画テストと家族絵画療法 (その1) — 精神医学, 26 (5), 452-463.
- 岩田銀子・森谷 潔 (2005). 初妊婦の不安とソーシャルサポート効果の検討 北海道大学大学院教育学研究科, 97, 57-67.
- 萱口雅博・千田茂博・久田 満 (1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (2) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 145-146.
- 菊島勝也 (1999). ストレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響 性格心理学研究, 7 (2), 66-76.
- 北本桜香・宮本邦雄 (2004). 児童の抑うつと家族雰囲気について—動的家族描画法を指標として— 東海女子大学紀要, 24, 147-153.
- 小林正幸 (2004). 事例に学ぶ 不登校の子への援助の実際 金子書房
- 永井 智 (2010). 大学生における援助要請意図—主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定図— 教育心理学研究, 58, 46-56.
- 中村住子・浦 光博 (2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について—対人関係の継続性の視点から— 社会心理学研究, 15 (3), 151-163.
- 奈須野玲加・石田 弓 (2016). 高校生における家族機能と学校適応感の関連について:動的家族画を用いた検討 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 15, 72-86.
- 西野泰代・小林佐知子・北川朋子 (2009). 日常ストレッサーが抑うつ傾向に及ぼす影響と自己価値の役割についての縦断研究 パーソナリティ研究, 17 (2), 133-143.

- 岡本百合・三宅典恵・神人 欄・矢式寿子・内野悌司・磯部典子・高田 純・矢島奈々恵・二本松美里・松山まり子・石原令子・杉原美由紀・古本直子・玉田美江・高橋涼子・山手紫緒・横崎恭之・日山 亨・吉原正治 (2013). 摂食障害の回復過程に関与する因子の検討 広島大学保健管理センター研究論文集, 29, 1-6.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41 (3), 302-312.
- 奥田紗史美 (2007). 青年期における摂食障害傾向と家族関係との関連－EDI-91 と動的家族画の数量的分析－ 広島大学大学院教育学研究科紀要, 56 (3), 207-216.
- 大久保純一郎 (2005). 中学生の精神保健に関する実態調査研究 (2)－ソーシャルサポートのストレス軽減効果について－ 帝塚山大学心理福祉学部紀要, 1, 41-50.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 下川朋子・室田洋子 (2009). 児童期における精神的回復力と家族コミュニケーションおよびソーシャルサポートとの関連 聖徳大学児童学研究紀要, 11, 59-66.
- 高橋正泰・大野博之 (2003). 動的家族画テスト (KFD) に見られる母親の描画特徴と心理特性－母子関係アセスメントとしての有効性の検討－ 九州大学心理学研究, 4, 279-285.
- 丹羽智美 (2003). 青年期の親への愛着によるソーシャル・サポート, サポート希求の差異とそのバランスの検討－父親, 母親, 友人に焦点をあてて－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 50, 279-284.